

平成 28 年 10 月 31 日

男子体操競技情報 24 号

(公財) 日本体操協会
 リオデジャネイロオリンピック男子体操競技強化本部
 審判委員会男子体操競技審判本部

【目 次】

1	はじめ	1
2	第 31 回オリンピック／リオ・デ・ジャネイロ大会審判報告	2
3	2017 年版採点規則 ルール概要	14

1. はじめに

リオデジャネイロオリンピック男子体操競技強化本部
 男子体操競技強化本部長 水鳥 寿思

今年 8 月にリオ・デ・ジャネイロで開催されました第 31 回オリンピック競技大会では、アテネ五輪以来 12 年ぶりの団体総合優勝を果たすことができました。選手の努力は言うまでもありませんが、コーチや審判員など、日本の強化に関わる全ての関係者のお力があってこそ成しえた功績であると強く実感しております。私自身、選手として団体金メダルを獲得したときには、監督として同じメダルを獲得する瞬間に立ち会うことができるとは夢にも思いませんでしたので、幸せな気持ちであると同時に、選手及び関係者のみなさまに対して感謝の気持ちでいっぱいです。

リオ五輪では団体総合優勝にほぼ全ての精力を費やしたと言っても過言ではありませんでした。ロンドン五輪で中国に大きく点差をつけられ、あわやメダルなしという状況まで追い込まれました。そのときのメンバーが 5 人中 4 人いるなか、キャプテンの内村航平選手を中心にリオ五輪でのリベンジを誓いました。チーム目標を団体総合優勝に絞ることで、自然とチームがまとまることができましたし、コンディショニングのピークを合わせることができました。これまで 4 年間での選手の努力は目を見張るものがありました。日本の課題は D スコアの向上であり、各選手が日本の伝統である美しい体操を体現しながら、演技価値点を上げていきました。特に直近の 2 年間では世界選手権 6 名とリオ五輪 5 名の団体決勝 D スコアを比較すると、2.4 点も高めることに成功しました。美しさに強さを兼ね備えることができた日本は、見事団体総合優勝を成し遂げることができたのです。

2013 年には種目別選手権を代表選考会として採用し、派遣標準得点を設定するなど、D スコアの向上、スペシャリストの育成にも力を入れました。白井健三選手などのスペシャリストが誕生するきっかけとなったほか、全体の競技力底上げにつながったと感じています。2015 年からは一転してチーム貢献度による選手選考や、候補選手の設置など団体総合で勝つための対策に舵を切りました。

個人総合でも内村航平選手が体操史に残る見事な逆転劇で大会 2 連覇を達成することができました。最後の鉄棒では怪我をしてもなお着地までピタリと止める姿は、体操関係者のみならず、多くの日本国民に感動を与えました。しかしながら、あれだけ完璧な演技でも外国

選手と大差がなかったことに対して、我々は危機感を感じなければいけません。そのような外部環境の中、2020 年東京五輪ではホスト国として、団体総合優勝のみならず、種目別までを含めた総合力で勝つという次のステージを目指していかなければなりません。これは容易なことではありませんし、選手のみならず、日本が一丸となって取り組むべき大きな目標であると感じております。そのための第 1 歩として、体操競技情報 24 号をここに通達し、新たなステージに向けた出発としたいと存じます。今後とも皆様方のご協力をよろしくお願い申し上げます。

2. 第 31 回オリンピック／リオ・デ・ジャネイロ大会審判報告

1) 派遣期間：2016 年 7 月 30 日(土)～8 月 19 日(金)

2) 開催地：ブラジル／リオ・デ・ジャネイロ

3) 会場：RIO OLYMPIC ARENA

4) 審判員：後藤 洋一（審判委員会副委員長）

5) 日程：大会スケジュール

7 月	30 日	(土)	出国 (PM10:00 発)		
	31 日	(日)	到着		
8 月	1 日	(月)	ユニフォーム合わせ		
			男子 FIG 技術委員・D 審判会議		
	2 日	(火)	男子審判会議・抽選 (C I)		
	3 日	(水)	男子ポディウムトレーニング		
	4 日	(木)	女子ポディウムトレーニング		
	5 日	(金)	開会式		
	6 日	(土)	男子予選		
	7 日	(日)	女子予選		
	8 日	(月)	男子団体決勝		
	9 日	(火)	女子団体決勝		
	10 日	(水)	男子個人総合決勝		
	11 日	(木)	女子個人総合決勝		
	12 日	(金)	トランポリン競技		
	13 日	(土)	トランポリン競技		
	14 日	(日)	種目別決勝 男子 Fx、PH 女子 VT、UB		
	15 日	(月)	種目別決勝 男子 SR、VT 女子 BB		
	16 日	(火)	種目別決勝 男子 PB、HB 女子 Fx		
	17 日	(水)	出国 (18 日 AM02:05 便)		
	19 日	(金)	帰国		

体操会場 RIO OLYMPIC ARENA



パッハ地区模型



マスコットのヴィニウス

6) 参加国：44 カ国（男子 98 名）

6 種目エントリー：49 名

ゆか：72 名 あん馬：71 名 つり輪：70 名

跳馬：55 名（2 跳越 17 名）平行棒：67 名 鉄棒：71 名

7) 審判会議：

D 審判会議、全体会議、いずれもルールに関する細かい内容は少なく各種目 2～3 項目の確認であった。D 審判の入力した得点が Supervisor の得点より高かった場合、得点算出システムが停止する度合いが示された (C-I : 0.3 以上、C-II・IV : 0.2 以上、C-III : 0.1、低い場合はすべての競技において 0.5 以上)。停止した際は委員長と種目担当の技術委員で映像を確認し D 審判へ結果を伝えるシステムであった。

□ ゆ か

- ・宙返りの着地で大きく動く場合、着地の準備ができていない追加減点がある。
- ・着地の際、両足をそろえない：－0.1、－0.3
- ・静止時間不足：2 秒未満－0.3、静止しない（＝難度不認定）－0.5

□ あん馬

- ・終末技を復行する場合があるので落下した際、要チェック
- ・下向き転向下りの角度は、肩と足先のラインで判定する。

□ つり輪

- ・後転系の力技は多少早い捌きでも難度認定し E 審判で対応
- ・開脚水平支持で脚が 45 度以上下がる：不認定
- ・難度表にない 2 秒以上の停滞：毎回－0.1

□ 跳 馬

- ・0 点跳越の確認

□ 平行棒

- ・モリスエやベレー、ハラダで腕支持になる際の体の伸ばしがない：－0.1、－0.3
- ・前方開脚 5/4 宙返り腕支持は、バーの上を開脚で越えなければならない。
- ・バプサーで明らかな支持局面が見られた場合、難度不認定

□ 鉄 棒

- ・採点確認のみでコメントなし

8) 新技申請：

□ 跳 馬

- ・前転とび前方かかえ込み 3 回宙返り：7.0

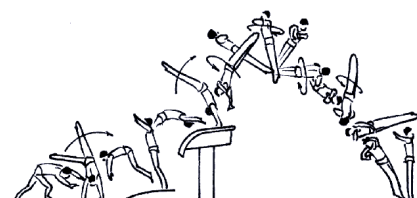
RADIVLOV Igor (UKR)

種目別決勝で実施したがほぼ転倒と同等の着地



- ・伸身ユルチェンコとび 7/2 ひねり：6.4

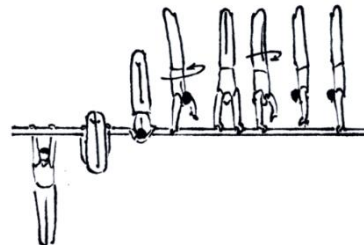
SHIRAI Kenzo(JPN) 種目別決勝で実施



□ 平行棒

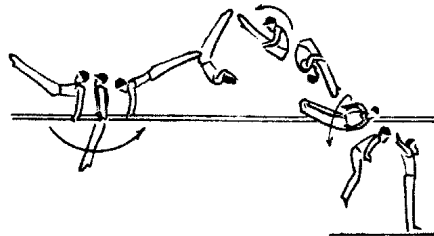
- ・ 正面横向き立ちから、逆上がりひねり倒立：E 難度(IV)

NGUYEN Marcel(GER) 予選、団体決勝にて実施



- ・ 前方屈身 2 回宙返りひねり下り：G 難度(V)

ARIKAN Ferhat (TUR) 未実施

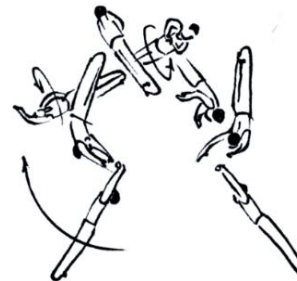


□ 鉄 棒

- ・ バーを越えながら後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり懸垂：I 難度(II)

BRETSCHNEIDER Andreas(GER) 個人総合決勝で実施したが落下

男子種目で初の I 難度が認定された。



9) 結 果：

□ 日本選手予選結果

団体総合	日本	269.294	4 位	予選通過
個人総合	内村 航平	90.498	2 位	予選通過
	加藤 凌平	89.232	6 位	予選通過
ゆ か	内村 航平	15.533	3 位	予選通過
	白井 健三	15.333	6 位	予選通過
あん馬	内村 航平	14.966	14 位	
	加藤 凌平	14.800	18 位	
つり輪	田中 佑典	14.733	17 位	
	内村 航平	14.700	20 位	
跳 馬	白井 健三	15.283	3 位	予選通過
平行棒	加藤 凌平	15.500	8 位	予選通過
	内村 航平	15.466	10 位	
鉄 棒	加藤 凌平	15.000	11 位	
	田中 佑典	14.666	24 位	
種目別は上位 2 名を記載				

□ 日本選手決勝結果

団体総合	日本	274.094	1 位 金メダル
個人総合	内村 航平	92.365	1 位 金メダル
	加藤 凌平	88.590	11 位
ゆ か	白井 健三	15.366	4 位
	内村 航平	15.241	5 位
跳 馬	白井 健三	15.449	3 位 銅メダル
平行棒	加藤 凌平	15.233	7 位

□ 団体予選

	国	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
1	CHN	43.599	44.865	46.000	45.466	47.233	43.298	270.461
2	USA	46.100	42.999	44.466	45.333	46.275	45.232	270.405
3	RUS	43.966	45.249	45.066	45.566	46.499	43.266	269.612
4	日本	46.099	44.299	44.133	45.932	44.832	43.999	269.294
5	GBR	45.799	46.233	43.874	43.066	44.932	44.766	268.670
6	BRA	45.600	43.799	43.866	45.182	44.766	44.865	268.078

□ 団体決勝

	国	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
1	日本	47.199	43.933	44.599	46.199	46.766	45.398	274.094
2	RUS	44.766	45.299	45.432	46.033	46.033	43.890	271.453
3	CHN	43.799	44.258	45.233	45.000	47.866	44.966	271.122
4	GBR	45.099	45.623	44.066	45.399	44.566	44.999	269.752
5	USA	43.757	43.699	44.465	45.865	46.333	44.441	268.560
6	BRA	41.733	43.433	44.332	45.032	44.533	44.665	263.728
7	GER	43.532	40.948	43.132	44.540	45.391	43.732	261.275
8	UKR	27.766	43.632	29.299	44.015	30.366	27.000	202.078

□ 個人総合予選

Rk.	選 手	国	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	VERNIAIEV O.	UKR	14.833	15.566	15.200	15.066	16.166	15.133	91.964
2	内村 航平	日本	15.533	14.966	14.700	15.533	15.466	14.300	90.498
3	BELYAVSKIY D.	RUS	14.600	15.300	14.533	14.900	15.933	14.533	89.799
4	DENG Shudi	CHN	15.033	14.866	14.300	15.300	15.800	14.366	89.665
5	WILSON N.	GBR	15.066	14.133	14.941	14.700	14.900	15.500	89.240
6	加藤 凌平	日本	15.033	14.800	13.966	14.933	15.500	15.000	89.232

□ 個人総合決勝(下段 : D-Score)

Rk.	選 手	国	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	内村 航平	日本	15.766 6.9	14.900 6.2	14.733 6.2	15.566 6.2	15.600 6.8	15.800 7.1	92.365 39.4
2	VERNIAIEV O.	UKR	15.033 6.9	15.533 7.0	15.300 6.6	15.500 6.0	16.100 7.1	14.800 6.5	92.266 40.1
3	WHITLOCK M.	GBR	15.200 6.8	15.875 7.2	14.733 6.0	15.133 6.0	15.000 6.4	14.700 6.7	90.641 39.1

4	BELYAVSKIY D.	RUS	15.000 6.5	14.76 6.6	14.533 6.2	15.133 6.0	15.933 6.9	15.133 6.4	90.498 38.6
5	LIN Chaopan	CHN	14.866 6.8	14.833 6.3	14.733 6.2	14.966 6.0	15.666 7.0	15.166 7.0	90.230 39.3
6	DENG Shudi	CHN	14.966 6.9	14.533 6.3	14.433 6.4	15.266 6.0	15.966 7.2	14.966 6.7	90.130 39.5
7	MIKULAK S.	USA	15.200 6.8	14.600 6.2	14.366 6.0	14.566 6.0	15.766 6.8	15.133 6.4	89.631 38.2
8	WILSON N.	GBR	14.900 6.5	14.066 6.1	14.933 6.4	15.000 5.6	15.700 6.8	14.966 6.9	89.565 38.3
11	加藤凌平	日本	15.266 6.7	14.900 6.4	14.566 6.2	15.058 6.0	14.900 6.6	13.900 6.5	88.590 38.3

□ 種目別決勝

◇ゆ か

Rk.	選 手	国	Score	D-Score	E-Score	Pen.
1	WHITLOCK Max	GBR	15.633	6.8	8.833	
2	HYPOLITO Diego	BRA	15.533	6.8	8.733	
3	MARIANO Arthur	BRA	15.433	6.7	8.733	
4	白井 健三	日本	15.366	7.6	7.766	
5	内村 航平	日本	15.241	6.9	8.641	0.3
6	DALTON Jacob	USA	15.133	6.7	8.433	
7	THOMAS Kristian	GBR	15.058	6.2	8.858	
8	MIKULAK Samuel	USA	14.333	6.6	7.833	0.1

◇あん馬

Rk.	選 手	国	Score	D-Score	E-Score
1	WHITLOCK Max	GBR	15.966	7.2	8.766
2	SMITH Louis	GBR	15.833	6.9	8.933
3	NADDOUR Alexander	USA	15.700	6.8	8.900
4	TOMMASONE Cyril	FRA	15.600	6.9	8.700
5	BELYAVSKIY David	RUS	15.400	6.6	8.800
6	KUKSENKOV Nikolai	RUS	15.233	6.8	8.433
7	MERDINYAN Harutyun	ARM	14.933	6.4	8.533
8	VERNIAIEV Oleg	UKR	12.400	5.7	6.700

◇つり輪

Rk.	選 手	国	Score	D-Score	E-Score
1	PETROUNIAS Eleftherios	GRE	16.000	6.8	9.200
2	ZANETTI Arthur	BRA	15.766	6.8	8.966
3	ABLIAZIN Denis	RUS	15.700	6.8	8.900
4	LIU Yang	CHN	15.600	6.9	8.700
5	RADIVILOV Igor	UKR	15.466	6.8	8.666
6	YOU Hao	CHN	15.400	7.0	8.400
7	PINHEIRO RODRIGUES Danny	FRA	15.233	6.9	8.333
8	GOOSSENS Dennis	BEL	14.933	6.6	8.333

◇跳 馬

Rk.	選 手	国	Score	Score	D-Score	E-Score	Pen.
1	RI Se Gwang	PRK	15.691	15.616 15.766	6.4 6.4	9.216 9.366	
2	ABLIAZIN Denis	RUS	15.516	15.600 15.433	6.4 6.2	9.200 9.233	
3	白井 健三	日本	15.449	15.833 15.066	6.4 5.6	9.433 9.466	
4	DRAGULESCU Marian	ROU	15.449	15.266 15.633	6.0 6.2	9.266 9.433	
5	NAGORNY Nikita	RUS	15.316	15.233 15.400	6.0 6.0	9.233 9.400	
5	VERNIAIEV Oleg	UKR	15.316	15.400 15.233	6.0 6.0	9.400 9.233	
7	GONZALEZ Tomas	CHI	15.137	15.375 14.900	6.0 5.6	9.375 9.300	
8	RADIVILOV Igor	UKR	15.033	14.933 15.133	7.0 6.0	7.933 9.133	

◇平行棒

Rk.	選 手	国	Score	D-Score	E-Score
1	VERNIAIEV Oleg	UKR	16.041	7.1	8.941
2	LEYVA Danell	USA	15.900	6.9	9.000
3	BELYAVSKIY David	RUS	15.783	6.9	8.883
3	DENG Shudi	CHN	15.766	7.2	8.566
5	LARDUET Manrique	CUB	15.625	7.1	8.525
6	MUNTEAN Andrei Vasile	ROU	15.600	6.6	9.000
7	加藤 凌平	日本	15.233	6.8	8.433
8	YOU Hao	CHN	14.833	7.4	7.433

◇鉄 棒

Rk.	選 手	国	Score	D-Score	E-Score
1	HAMBUECHEN Fabian	GER	15.766	7.3	8.466
2	LEYVA Danell	USA	15.500	7.3	8.200
3	WILSON Nile	GBR	15.466	6.8	8.666
4	MIKULAK Samuel	USA	15.400	6.8	8.600
5	BARRETTO Jr. Francisco	BRA	15.208	6.9	8.308
6	LARDUET Manrique	CUB	15.033	7.0	8.033
7	ZONDERLAND Epke	NED	14.033	6.9	7.133
8	VERNIAIEV Oleg	UKR	13.366	6.3	7.066

10) メダル獲得国

◇種目別メダル獲得国

	団体	個人	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒
金	日 本	日 本	GBR	GBR	GRE	PRK	UKR	GER
銀	RUS	UKR	BRA	GBR	BRA	RUS	USA	USA
銅	CHN	GBR	BRA	USA	RUS	日 本	RUS	GBR

◇国別メダル獲得数

2016 リオ五輪

	金	銀	銅	計
日本	2		1	3
GBR	2	1	2	5
UKR	1	1		2
GRE	1			1
PRK	1			1
GER	1			1
RUS		2	2	4
USA		2	1	3
BRA		2	1	3
CHN			1	1

2012 ロンドン五輪

	金	銀	銅	計
日本	1	2		3
CHN	3	1	1	5
HUN	1			1
BRA	1			1
KOR	1			1
NED	1			1
GBR		1	2	3
GER		3		3
RUS		1	1	2
ITA			1	1
UKR			1	1
FRA			1	1
USA			1	1

前回のロンドン大会と比較するとメダル獲得国は 13 か国から 10 か国に減った。メダル獲得数 1 個の国が 8 か国から 4 か国となり、鉄棒の Zonderland 選手（NED）や跳馬の Yan Hak Seon 選手（KOR）のようなスペシャリストのメダル獲得が少なかったことが考えられる。

11) 所 感

団体出場国は、前年の世界選手権のメンバー 6 名から五輪で 5 名にどのように編成するかが課題であった。各国共に得意種目と不得意種目がはっきりしているため、どの種目に重点を置くかで 5 人を決定する苦慮がみられた。日本は、内村選手を前年に内定し NHK 杯最上位者の加藤選手を軸にして全日本種目別選手権で最高チーム得点が得られる 3 名（白井選手、田中選手、山室選手）を決定した。

下記に今サイクルの団体上位国のメンバーの動向を示した。

◇団体上位国メンバー推移

			生年	2016	2015	2014
日 本	1	加藤 凌平	1993	○	○	○
	2	白井 健三	1996	○	○	○
	3	田中 佑典	1989	○	○	○
	4	内村 航平	1989	○	○	○
	5	山室 光史	1989	○	▲	
	6	野々村 笙吾	1993			○
	7	早坂 尚人	1995		○	
	8	萱 和磨	1996		○	
	9	亀山 耕平	1988			○

ロシア	1	ABLIAZIN Denis	1992	○	○	○
	2	BELYAVSKIY David	1992	○	○	○
	3	STRETOVICH Ivan	1996	○	○	○
	4	KUKSENKOV Nikolai	1989	○	○	○
	5	NAGORNYI Nikita	1997	○	○	
	6	IGNATYEV Nikita	1992	◆	○	○
	7	POLIASHOV Vladislav	1996			○
中国	1	DENG Shudi	1991	○	○	○
	2	LIN Chaopan	1995	○	○	○
	3	LIU Yang	1994	○	○	○
	4	YOU Hao	1992	○	○	○
	5	ZHANG Chenglong	1989	○	○	○
	6	CHENG Ran	1991			○
	7	XIAO Routeng	1996		○	
イギリス	1	BEVAN Brinn	1997	○	○	
	2	SMITH Louis	1989	○	○	
	3	THOMAS Kristian	1989	○	○	○
	4	WHITLOCK Max	1993	○	○	○
	5	WILSON Nile	1996	○	○	○
	6	KEATINGS Daniel	1990			○
	7	PURVIS Daniel	1990		○	○
	8	TULLOCH Courtney	1995			○
アメリカ	1	BROOKS Christopher	1986	○	○	
	2	DALTON Jacob	1991	○		○
	3	LEYVA Danell	1991	○	○	○
	4	MIKULAK Samuel	1992	○		○
	5	NADDOUR Alexander	1991	○	○	○
	6	OROZCO John	1992	◆		○
	7	WHITTENBURG Donnell	1994		○	○
	8	RUGGERI III Paul	1988		○	▲
	9	WYNN Brandon	1988		○	

○：正選手 ◆：直前変更前の選手 ▲：補欠登録 色は個人メダル獲得

アメリカは競技会で個人総合上位3名（Mikulak選手、Brooks選手、Dalton選手）に種目別でOrozco選手とNaddour選手が選出された。両名はアメリカの不得意とするあん馬でチーム得点に貢献する選手であった。つり輪、跳馬、平行棒等で貢献するWhittenburg選手（2015AA8位、跳馬3位）と平行棒、鉄棒で貢献するLeyva選手（2015鉄棒2位）は補欠となり、団体戦でのあん馬の得点を重視している方向性が見えた。しかし、7月中旬にOrozco選手が怪我（膝靱帯損傷）によりLeyva選手と交代した。結果的にLeyva選手は種目別平行棒と鉄棒で銀メダルを獲得した。イギリスは、Whitlock選手、Wilson選手を軸にメンバーを構成し、オールラウンダーのPurvis選手（2015AA7位）が外れ、あん馬1種目だけのSmith選手が代表となった。団体戦よりSmith選手の種目別あん馬のメダルを重視したようであった。中国は、2014年からほぼ固定したメンバーで世界選手権では6番目の選手を入れ替えていた。2015年に代表となったXiao Routeng選手はあん馬を得意とするオールラウンダーであったが、競技会で失敗が多いことが原因か代表入りしなかった。ロシアも中国同様数年来固定したメンバーであったが、大会直前にIgnatiev選手からStretovich選手に変更した。

一方、オランダのように団体出場でありながら Zonderland 選手は鉄棒のみ、Van Gelder 選手はつり輪のみと明らかに団体戦は重視していない国もあった。ウクライナも同様の対応に見えた。団体予選で 7 位になり決勝に進んだが、ベスト 3 にもかかわらず、ゆか、つり輪、鉄棒で二人しか演技をせず、Verniaiev 選手が 2 種目のみのエントリーで団体の結果は放棄しているようであった。

下記は、団体決勝における D-Score の比較である。2014 年の世界選手権では 0.1 差で中国の後塵を押し D-Score の差（対中国 -2.70）がその要因に挙げられた。日本は D-Score を上げるべく方針を打ち出したが、なかなかチーム全体として上がらず 2015 年は D-Score の差は広がった。実際には過失により予定の D-Score が獲得できなかったことも考えられる。しかし、昨年は実施（E-Score）の差で 37 年ぶりの団体優勝を成し遂げることができた。ライバル中国は更なる D-Score の向上を打ち出し平行棒で成果を見せたが、団体メンバーが一人減ったことであん馬、つり輪で D-Score を大きく下げてしまい前年より低い値となった。結果として中国との D-Score の差は 0.5 という僅差になっていた。

◇2014-2016 団体決勝D-Score 比較

		FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total	E-Score
日 本	2014	20.7	19.0	18.9	17.6	19.9	20.2	116.3	157.369
	2015	21.5	19.1	18.5	18.2	19.6	19.3	116.2	154.618
	2016	21.2	19.0	18.9	18.2	20.2	21.2	118.7	155.394
中 国	2014	19.9	18.7	20.5	18.0	20.7	21.3	119.1	154.269
	2015	19.9	19.6	20.6	18.0	19.3	21.0	120.5	149.459
	2016	20.2	18.7	19.7	18.0	21.6	21.0	119.2	151.922
アメリカ	2014	20.0	18.6	19.6	18.0	20.2	20.1	116.5	154.069
	2015	19.2	19.0	19.9	17.8	20.1	21.1	117.1	151.053
	2016	19.7	18.4	18.8	18.0	20.2	20.3	115.4	153.352
イギリス	2014	19.3	20.5	18.6	17.6	18.4	19.2	113.6	155.670
	2015	19.7	20.8	18.2	18.0	19.3	19.3	115.3	155.245
	2016	19.5	20.9	18.2	18.0	19.8	20.0	116.4	153.552
ロシア	2014	20.0	18.6	19.9	17.6	19.5	19.9	115.5	151.203
	2015	19.7	18.5	19.1	18.4	19.9	19.9	115.5	153.262
	2016	20.4	18.8	19.3	18.4	19.9	19.3	116.1	155.453

E-Score については昨年の世界選手権と同等の基準であった。最終日の Briefing の際、委員長より今大会の採点に関する総評で「予選では多少の偏りのある採点がみられたが問題のあるレベルではなく、決勝では bias を感じるような採点がなかった」と報告された。

D-Score に対する質問（Inquiry）は、昨年の世界選手権と同様にアリーナ内のデスクへ提出する方式であった。受理されると会場内大画面モニターに掲示され、その後 D-Score の変更の有無も掲示された。各種目の採点傾向は以下のような印象を受けた。

ゆ か：着地の減点、特に中過失の減点が明確で、大きく跳ねるような着地には、「着地前の準備がない」という追加の減点がなされていた。また、グループ I の技では十字倒立、エンドーロール、ゴゴラーゼ、フェドルチェンコ等が多く実施されていたが明確な実施の差

325	CHN	SHANG Chunsong
327	CHN	WANG Yan
324	CHN	MAO Yi
393	USA	HERNANDEZ Lauren
395	USA	RAISMAN Alexandra
391	USA	BILES Simone

Enquiry Submitted: FAN Yilin (CHN) - Balance

が出ていなかった。種目別優勝の Whitlock 選手はグループ I の技が 3 技あり着地が少ない分、高い E-Score となっていた。

あん馬：体線がよく、すっきりした旋回を実施する選手が少なく、D-Score の高さがそのまま評価に反映する結果となっていた。全競技を通して E-Score が 9 点台の選手は皆無であり、Smith 選手の種目別決勝 8.933 が最も高い得点であった。上位選手の演技構成もほぼ似たような構成でフロップ、コンバイン、ウ・グォニアン、終末技で E 難度、前後移動、交差技で D 難度によって、D-Score 6 点台後半をどう獲得するかであった。

つり輪：従来通り静止時間の減点が厳密に行われていた。日本選手の中では田中選手が常に高い得点 (D:6.1、E、CI:8.633、CIV:8.833) であり、予選では田中選手 17 位、内村選手 20 位、山室選手 21 位、加藤選手 49 位という結果であった。つり輪を得意とする山室選手は E-Score が CI:8.100、CIV:8.266 と 15 点 (D:6.6) に届かなかった。つり輪で種目別決勝に進出した 8 名中 4 名が予選でつり輪のみの実施であった (うち 1 名は棄権)。

跳 馬：種目別決勝ではウクライナの Radivilov 選手によって前転とび前方かかえ込み 3 回宙返りが実施された。前転とび前方かかえ込み宙返り (2.8) とローチェ (5.6) の差から D-Score:8.4 を希望したようであったが MTC の判断で 7.0 におさまった。現時点では無謀な挑戦のようにとられ奨励するような D-Score とはならなかったが、ローチェが発表 (1979 年) されて十数年後には世界のトップクラスの選手が実施していることから、追随する選手が今後現れるかもしれない。結局のところ、尻がマットに着くようなしやがみ立ちで E:7.933 であり、E 審判団も厳しい判断をした。一方白井選手が発表したユルチェンコ 7/2 ひねりでは着地 1 歩でおさめたため、E-Score:9.433 と高評価を得た。



平行棒：モリスエやバーレのような宙返りから腕支持になる技では身体の伸ばしや受け方などの減点が多いためか、種目別決勝では中国 2 選手と加藤選手しか実施しなかった。メダリスト 3 名はいずれも宙返り腕支持技を実施しなかった。また、種目別決勝 8 名中 6 名が前方系の終末技であった。

鉄 棒：ひねり系の角度の減点が厳密になされるため、ひねり系の技が少ない演技の E-Score が高いように感じた。E-Score が高かったのは Mikulak 選手 (CI:8.733、CII:8.700、CIII:8.666、CIV:8.600)、内村選手 (CII:8.700)、Wilson 選手 (CI:8.500、CII:8.666、CIII:8.666、CIV:8.666) で、ひねって大逆手もしくは片大逆手になる技が 1~2 技であった。Mikulak 選手と Wilson 選手は終末技や手放し技の際の車輪においてバーの下で膝をまげないで実施していた。この点が採点にどこまで反映されているかはわからないが、丁寧な実施の印象を受けた。モズニク系の技でひねりの完了 (50%以上) に対する減点があいまいであったように感じた。

日本男子チームはアテネ五輪以来の団体金メダルを獲得した。前年の世界選手権で団体優勝し、実力を十分につけて挑んだオリンピック大会であった。しかし予選では本来の力を発揮することができず団体 4 位となったうえ、種目別決勝の可能性のあった種目も落としてしまう結果となってしまった。右記はロンドン五輪以降の日本チームのメダル獲得数である。2013 年が最多

◇ロンドン五輪以降日本が獲得したメダル数

	金	銀	銅	計
2016	2	0	1 (1)	3 (1)
2015	4 (2)	0	1 (1)	5 (3)
2014	1	3 (2)	2 (1)	6 (3)
2013	4 (3)	1	2 (2)	7 (5)
2012	1	2 (1)	0	3 (1)

() 内は種目別でのメダル数

の 7 個であったが年々減少し、リオ五輪では種目別のメダルは跳馬での銅メダル 1 個であった。団体・個人総合を重視する日本の方針と個人出場の種目スペシャリストの存在を考えると、特にオリンピックでの種目別のメダル獲得は厳しいのかもしれない。ロンドン五輪でも予選 5 位と出遅れたこともあり、予選での戦い方如何で種目別メダルに係わるので次回への大きな課題となるであろう。

中国は、最有力ライバルとされたが団体銅メダル一つに終わった。ロンドン五輪（金 3 銀 1 銅 1）や前年世界選手権（金 1 銀 2 銅 4）と比べると惨敗のような結果であった。団体決勝では大過失が 2 演技（ゆか、つり輪）あり、その他は全体的にまとめた演技はしているが動きが硬く E-Score が伸びなかった。つり輪、平行棒では力強さを感じるが逆にあん馬や鉄棒では肩に力が入り、しなやかさがなく減点につながったのかもしれない。

ロシアはシドニー五輪（2000 年：銅）以来の団体メダルを獲得した（2006 年オーフス団体銀）。団体決勝では大過失 1 つであり、E-Score の合計はわずかであるが優勝した日本よりも高い数値であった。2014、2016 とヨーロッパ選手権で団体優勝し地力がついてきたともいえる。D-Score はゆかと鉄棒以外は拮抗している状況である。

イギリスは自国開催であったロンドン五輪の銀 1 銅 2 個から金 2 銀 1 銅 2 個とメダルを増加した。Wilson 選手 20 歳、Bevan 選手 19 歳と若手の活躍や全競技を通じて金 27 個はアメリカに次ぐ第 2 位であり、ロンドン五輪後も国全体として強化が継続され結果にもつながっている。自国で五輪を開催した後も結果を収めている国として今後も注目する必要があると感じた。

アメリカは団体予選 2 位であったが、決勝では自滅してしまった。メダル獲得した国が予選よりも得点を伸ばした中で団体決勝では Naddour 選手や Leyva 選手が得意種目でミスがあり、ゆかと鉄棒で大きく得点を落とし予選よりも 1.845 得点を下げてしまった。Mikulak 選手は丁寧な演技から個人総合でメダルのチャンスがあったが D-Score、E-Score とともに伸ばしきれず 90 点に到達しなかった。

1 2) 種目別上位者の演技構成

◆ ゆ か

1. WHITLOCK Max (GBR) 15.633 D6.8 E8.833

前方宙返り 1 回ひねり～前方宙返り 5/2 ひねり (C+E)、後方宙返り 7/2 ひねり～前方宙返り ひねり (E+B)、シュピンデル旋回～倒立、下ろして旋回 (D)、開脚旋回倒立とび 180° ひねり開脚旋回 (D)、十字倒立 (C)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 3/2 回ひねり (D+C)、伸身トーマス (E)、後方宙返り 3 回ひねり (D)

2. HYPOLITO Diego (BRA) 15.533 D6.8 E8.733

後方宙返り 3/2 ひねり～前方宙返り 5/2 ひねり (C+E)、後ろとびひねり前方かかえ込み 2 回宙返り+前方宙返り 1 回ひねり (D+C)、後ろとびひねり前方屈身 2 回宙返り (E)、十字倒立 (C)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 2 回ひねり (D+D)、トーマス (D)、後方宙返り 3 回ひねり (D)

3. MARIANO Arthur (BRA) 15.433 D6.7 E8.733

前方屈身 2 回宙返り～前方かかえ込み宙返り (E+A)、後方伸身宙返り 2 回ひねり後方屈身宙返り (F)、十字倒立 (C)、倒立から伸膝前転脚前挙支持経過倒立 (C)、伸身トーマス (E)、前方宙返り 2 回ひねり～前方宙返り ひねり (D+B)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 1 回ひねり (D+C)、後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり (D)

◆ あん馬

1. WHITLOCK Max (GBR) 15.966 D7.2 E8.766

逆交差倒立(D)、コンバイン(E)、フロップ(E)、ブスナリ(G)、シュピンドル(D)、マジヤール(D)、シバド(D)、ウ・グオニアン(E)、ロシアン 1080° (D)、dsA 倒立 450° ひねり 3/3 移動下り(E)

2. SMITH Louis (GBR) 15.833 D6.9 E8.933

逆交差倒立(D)、リーニン(D)、フロップ(E)、コンバイン(E)、シュピンドル(D)、ウ・グオニアン(E)、ロシアン 1080° (D)、マジヤール(D)、シバド(D)、dsA 倒立 450° ひねり 3/3 移動下り(E)

3. NADDOUR Alexander (USA) 15.700 D6.8 E8.900

逆交差倒立(D)、リーニン(D)、フロップ(E)、コンバイン(E)、シュピンドル(D)、ウ・グオニアン(E)、ロス(D)、マジヤール(D)、シバド(D)、dsA 倒立 3/3 移動下り(D)

◆ つり輪

1. PETROUNIAS Eleftherios (GRE) 16.000 D6.8 E9.20

ヤン・ミンヨン(E)、バングルダー (E)、ゆっくり後方伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、後方車輪(C)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ナカヤマ(D)、ホンマ十字懸垂(D)、ジョナサン(D)、前方車輪(C)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

2. ZANETTI Arthur (BRA) 15.766 D6.8 E8.966

ヤン・ミンヨン(E)、背面水平懸垂静止から中水平支持(F)、ほん転逆上がり倒立(C)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ゆっくり伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、ナカヤマ(D)、ジョナサン(D)、ホンマ十字懸垂(D)、後ろ振り上がり倒立(C)、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り(D)

3. ABLIAZIN Denis (RUS) 15.700 D6.8 E8.900

ゆっくり伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、背面水平懸垂静止から中水平支持(F)、ヤマワキ(C)、ジョナサン(D)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ナカヤマ(D)、アザリアン (D)、後ろ振り上がり倒立(C)、後方車輪倒立(C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(F)

◆ 跳 馬

1. RI Se Gwang (PRK) 15.691

1 本目：屈身ドラグレスク 15.616 D6.4 E9.216

2 本目：リ・セグウアン 15.766 D6.4 E9.366

2. ABLIAZIN Denis (RUS) 15.516

1 本目：リ・セグウアン 15.600 D6.4 E9.200

2 本目：リー・シャオペン 15.433 D6.2 E9.233

3. 白井 健三 (JPN) 15.499

1 本目：伸身ユルチェンコ 7/2 ひねり 15.833 D6.4 E9.433

2 本目：ドリッグス 15.066 D5.6 E9.466

◆ 平行棒

1. VERNIAIEV Oleg (UKR) 16.041 D7.1 E8.941

後ろ振り上がり前方宙返り支持(D)、棒下宙返りひねり倒立(E)、シャルロ(E)、単棒倒立からヒーリー(E)、棒下宙返り倒立(D)、チップルト(D)、バブサー (E)、ヒーリー(D)、ピータース(D)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(F)

2. LEYVA Danell (USA) 15.900 D6.9 E9.000

逆上がり倒立(D)、テンハイビン(F)、シャルロ(E)、棒下宙返り 3/4 ひねり倒立(E)、後方車輪 5/4 ひねり倒立(E)、後方車輪 1 回ひねり倒立(D)、後方車輪(C)、ハラダ(D)、前振りひねり倒立(C)、前方かかえ込み 2 回宙返り下り(E)

3. BELYAVSKIY David (RUS) 15.783 D6.9 E8.883

逆上がり倒立(D)、シャルロ(E)、前振り上がりディアミドフ(E)、チップルト(D)、バブサー(E)、後振り上がり前方宙返り支持(D)、ヒーリー(D)、ピータース(D)、前振りひねり倒立(C)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(F)

◆ 鉄 棒

1. HAMBUECHEN Fabian (GER) 15.766 D7.3 E8.466

カッシーナ (G)、コールマン(F)、伸身トカチェフ〜リバルコ (D+D)、アドラー1 回ひねり片逆手倒立〜ヤマワキ(D+D)、シュタルダーとび 3/2 ひねり大逆手(E)、アドラーひねり倒立(D)、後方とび車輪 1 回ひねり(C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

2. LEYVA Danell (USA) 15.500 D7.3 E8.200

アドラー1 回ひねり逆手倒立〜ヤマワキ(E+D)、伸身コバチ(E)、コールマン (F)、シュタルダーとび 3/2 ひねり片大逆手(D)、アドラーひねり倒立〜伸身トカチェフ〜リバルコ(D+D+D)、エンドー1 回ひねり大逆手(D)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

3. WILSON Nile (GBR) 15.466 D6.8 E8.666

カッシーナ (G)、コールマン(F)、リバルコ (D)、アドラー1 回ひねり逆手倒立(E)、アドラーひねり倒立(D)、伸身トカチェフ(D)、トカチェフ(C)、シュタルダー (B)、後方とび車輪 1 回ひねり(C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

3. 2017 年版採点規則 ルール概要

2017 年版採点規則は国際体操連盟 (FIG) より 7 月に HP に発表されましたが、最終決定は 11 月末に開催されます大陸間審判講習会 (Intercontinental Judges' Course) での国際体操連盟・男子技術委員会 (FIG・MTC) の発表と講習会での質疑応答を受けて正式通達されます。

ここに記載する内容は 7 月に発表された内容をもとに、2013 年版からの変更箇所、新しく追加された内容等を抽出し、掲載いたしました。また、FIG・MAG からの確認が取れた追記情報も記載しました。

今後、追加や変更も考えられますが、いち早く現場での対応をしていただくために新ルール概要として、発表することといたします。

本概要をもとに 2017 年からの競技会を見据え、冬場のトレーニングに励んでいただきたいと存じます。

なお、規則内での不明な点や矛盾点、曖昧な箇所等に関しては、2017 年 1 月の 1 種審判伝達研修会にて、伝達いたします。

<一般条項>

1. 難度設定が A から H までになった。
2. 技のグループが 4 つになった。これにより、グループ点は最大 2.0 となる。

3. 同一グループ内から最大 5 つの技を 10 技に含めることができるようになった。
4. 繰り返しは出現順を基本とすが、種目によっては繰り返しの特例があり、難度の高い技からカウントする場合もある。

＜ゆか変更点＞

1. 技のグループ

- I 跳躍技以外の技
- II 前方系の跳躍技
- III 後方系の跳躍技

- ① 後ろとびひねり系の技は後方系の跳躍技に含まれる。例えば、後ろとびひねり前方かかえ込み 2 回宙返りひねりは後方 2 回宙返り 1 回ひねりと同じ技である。
- ② 側方宙返り技が削除された（ローウンを除く）。
- ③ 宙返り転やとび正面支持になる技は削除された。
- ④ 宙返り技のあとに、とび正面支持臥になる捌きは大欠点となる。
- ⑤ 一般規則においては、演技中に 2 回宙返り技が要求されており、その技はカウントされる 10 技に含まれていなければならない。カウントされていない場合、D 審判による 0.3 のニュートラルディダクションとして減点される。

2. 組合せ

- ① 組合せ加点は、技の前後に与えることができ、D スコアにカウントされる 10 技の内に入っている必要はない（ただし繰り返した技は認められない）。
- ② D 難度以上と B または C 難度の跳躍技との組み合わせには、0.1 の加点が与えられる。もし、両方の跳躍技が D 難度以上であれば、0.2 の加点が与えられる。

$$\bigcirc \quad \text{D 難度以上} \quad + \quad \text{B} \cdot \text{C 難度} \quad = \quad 0.1$$

この逆も可

$$\bigcirc \quad \text{D 難度以上} \quad + \quad \text{D 難度以上} \quad = \quad 0.2$$

- ③ 後方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねりから前方宙返り 1 回ひねりなどの切り返し系の宙返り技には組合せ加点は与えられない。
- ④ 一演技につき最大 2 組までの組合せ加点が与えられる。
- ⑤ 組合せ加点が 3 つ以上の場合、高い組合せから 2 つをカウントする。

3. その他

選手はフロアエリア全面を使用しなければならない。アクロバット技に際する同一対角線の使用回数に関しての制限はない。しかし各コーナーを使用しなければならず、不使用の場合、D 審判による 0.3 のニュートラルディダクションとなる。

4. 難度変更・新規

- 開脚座から十字倒立 : C
- 十字倒立 : C→B
- 開脚旋回倒立とび 1 回ひねり下ろして開脚旋回 : D
- 前方かかえ込み・屈身宙返りひねり : B→A

○前方かかえ込み宙返り 1 回・3/2 回ひねり	: C→B
○前方かかえ込み 2 回宙返りひねり	: D→E
○前方屈身 2 回宙返りひねり	: E→F
○前方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり	: E→F
○後方かかえ込み宙返り 3/2 回ひねり	: C→B
○後方かかえ込み 2 回宙返り 3/2 回ひねり	: D→E
○後方かかえ込み 2 回宙返り 5/2 回ひねり	: E→F
○後方伸身 2 回宙返り 5/2 回ひねり	: F→G
○後ろとびひねり前方屈身 2 回宙返り (かかえ込みと同枠)	: E→D
○後方かかえ込み 3 回宙返り	: G→H
○後ろとびひねり前方伸身 2 回宙返り (タマヨ)	: F→E

<あん馬変更点>

1. 技のグループ

- I 片足振動技・交差技
- II 旋回・旋回倒立・転向技
- III 旋回移動・転向移動技
- IV 終末技

- ① 移動技で落下した場合、部分的に難度が与えられることはない。例：マジヤール移動で 2 つ目の把手を越えて移動を続けようとして落下した場合、難度は与えられない。
- ② 一把手上のすべての交差倒立技は、倒立の前後で支持の手あるいは把手を変えなければならない。
- ③ フロップとコンバインは続けることはできず、少なくとも片手が 1 把手から離れた旋回を挟まなければならない。
- ④ ショーンやベズゴは立位から（旋回抜きで）行くと、二段階の格下げになる。
- ⑤ DSA は開始と終了の 1/4 転向を必要とする。

2. 繰り返し

- ① 1 演技中、縦向きでの 3 部分移動は前移動 1 回、後ろ移動 1 回のみ認定される。
この規則に該当する技は以下の 6 技に限定される。
 - 縦向き前移動 3/3 (馬端～把手～把手～馬端)
 - マジヤール
 - ドリッグス
 - ビロゼルチェフ
 - 縦向き後ろ移動 3/3 (馬端～把手～把手～馬端)
 - シバド
 ※ニンレイズのタイプの技（縦向き 3/3 移動ひねり）はこの原則から除外される。
- ② ロシアン転向技は、終末技を含めて 1 演技 2 回まで。
 - ※ コンバインやクロル、ウ・グオニアン、ロス、トンフェイ等には適用しない。
- ③ 交差、旋回からの倒立を経過する技は演技中 2 回まで認められる（終末技を除く）。

3. 終末技

- ① 選手が落下や大過失により終末技が獲得できていないと判断した場合は、(1 回だけ) 終末技をやり直すことができる。その場合、所定の時間内に行わなければならない。(階段を含め) ポディウムから下りた時点で、やり直す権利は失効となる。
- ② 終末技をやり直す場合、演技再開までに 30 秒間与えられ、どの終末技を選択してもよい。

4. あん馬特有の減点

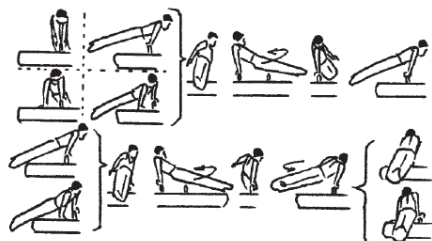
- 馬体の 3 部分を使用しない : -0.3 E 審判→D 審判
- 旋回で腰が折れる : -0.1 -0.3
- 旋回の大きさ不足 : 全体の旋回→個々の技による減点 (FIG・MAG 情報)
- 交差倒立で脚を閉じない : -0.1 -0.3
- 倒立で、脚が下がる : -0.1 -0.3 -0.5

5. 難度変更・新規

- 正交差倒立横移動しながらひねり開脚支持 (ステパンヤン) : C
- ブスナリ : G→F
- 両把手を挟んで (開脚) 旋回 1 回ひねり (2 回以内の旋回で) : E→F
- 横向きポメル上 (開脚) 旋回 1 回ひねり (2 回以内の旋回で) ベルキ : E
- ショーン : D→E
- 馬端縦向きから上向き 270° 転向 : B
- 一把手上下向き 270° 転向 : C
- 開脚旋回前移動 3/3 部分 : D→E
- 開脚旋回後ろ移動 3/3 部分 : D→E
- トンフェイ (横～横、横～縦、縦～横、縦～縦) : D
- ※終末局面で旋回 1 周につなげることを条件とする
- 背面横移動ひねり正面横移動ひねり (馬端～馬端) : D→E
- 正面横移動ひねり背面横移動ひねり (馬端～馬端) : D→E

6. その他

- ① 1 把手上旋回 (ループ) の解釈が変更になった。



※縦向きで馬端から 1 把手へ移動したらループとなる。

- ② DSA は開始と終了の 1/4 転向を必要とする。
- ③ 下記に示す捌きはループの 3 連続と判断され、D フロップには認定されなくなった。



＜つり輪変更点＞

1. 技のグループ

- I 振動・振動倒立技
- II 力技・静止技
- III 振動からの力静止技
- IV 終末技

- ① 終末姿勢が同一の力静止技はグループで1度だけ難度が認められる。例えば十字懸垂であれば「ナカヤマ（II）」と「振り上がり十字懸垂（III）」ならば両方使える。
- ② 閉脚水平支持と開脚水平支持は同一形態の力技となり、グループ内でどちらか一方しか使うことができない。十字懸垂、脚前挙十字懸垂、脚上挙十字懸垂も同一の力技となる。（FIG・MAG情報）
- ③ グループIIやIIIを連続して4回続けることはできない。3連続の後にグループIのB難度以上が入れば改めて3連続が可能である。このB難度以上の振動技はカウントされる10技または同一グループ内で上位5技以内に含まれていなければならない。
- ④ 1つの振動倒立技が要求され、カウントされる10技に入っていないとてはならない。

2. その他

- ① すべての脚上挙姿勢（2秒）は脚部が垂直でなければならない。ゆかで要求される姿勢と同様である。
- ② 演技は腕が垂直かつまっすぐな懸垂姿勢で開始しなければならない。屈腕が認められている技以外は最初の姿勢に持ち込む際に、肘をまげてはならない。
- ③ 演技中、技から別の技へつなげる際、正しく捌くのに必要とされる場合のみ、肘をまげることが認められる。
- ④ 難度表に掲載の無い姿勢での2秒以上の静止は、毎回0.1の減点となる。典型的な例は、（屈身）逆懸垂や背面懸垂姿勢である。
- ⑤ ナカヤマは完全な背面水平懸垂を経過しなければならない。不完全な場合は実施減点や不認定もあり得る。
- ⑥ 背面懸垂は、（脚上挙）十字懸垂へ引き上げる開始の姿勢としては認められず、十字懸垂（や他の力静止技）の難度を高めることはできない。もし、（脚上挙）十字懸垂が直接、背面懸垂姿勢から引き上げられた場合は、採点規則上の単独の難度（それぞれCとB）を得ることとなる。
- ⑦ 力静止技での深すぎる握りは許されない。深すぎる握りとは力技の際、負担を軽減するために手首を巻き付ける実施のことであり、毎回0.1の減点となる。正しい握りとは、手指が輪を握るにせよ握らないにせよ、手首がまっすぐな捌きである。手指を伸ばす輪の握り方は評価の対象ではない。
- ⑧ 技術的に最低限前腕部がケーブルに触れることを必要とする屈腕力倒立技においてのみ、ケーブルに触れたことに対する減点をしない。（屈腕屈身力倒立、屈腕伸身力倒立）
- ⑨ ヤマワキやジョナサンで完全な支持や停滞が見られた場合は、振動技で力を使用したことによる0.5の減点であり、技は不認定となる。わずかな支持の場合、小・中欠点を伴い認定される。不認定の場合、選手の意図とは異なるため、「ホンマ支持」と「支持後ろ振り前に回りながら懸垂」の2技に分割して価値を認めることはない。
- ⑩ 押し上げや引き上げ技で姿勢の変化に乏しい実施は、実施減点の対象となり、不認定となる可能性もある（例：中水平支持～水平支持、背面水平懸垂～中水平支持）。

3. 難度変更・新規

○リーニン 2	: C→B
○リーニン 2 ～十字懸垂	: D→C
○ツカハラ 3 (脚上挙十字懸垂から引き上げ脚上挙)	: D
○バランディン 2	: E→F
○前振り上がり脚前挙	: グループⅢへ
○け上がり脚前挙	: グループⅢへ
○ホンマ脚前挙	: グループⅢへ
○ツカハラ (リーニン系から脚上挙十字懸垂)	: E→D
○後方かかえ込み 3 回宙返り下り	: F→G
○後方かかえ込み 2 回宙返り 5/2 ひねり下り	: F

<跳馬変更点>

1. 技のグループ

- I 前転とびの技
- II 第一局面で 1/4 または 1/2 ひねりの技
- III ロンダート踏み切り～後転とびの技
- IV ロンダート踏み切り～1/2 ひねりの技
- V ロンダート踏み切り～3/4 または 1 回ひねりの技

2. Dスコアについて

- ① 基本的には 2013 年版採点規則価値点の-0.4。
ツカハラ、カサマツ、ユルチェンコのかかえ込みや屈身は価値が下がっている。
クロル、カンボスの価値点は下がっていない。
- ② 前転とびと側転とび 1/4 ひねりの技はひねりが 1/2 増えるごとに+0.2 となる。
- ③ ロンダートから 3/4 または 1 回ひねりを加えて着手する技は、類似したカサマツ系の技よりも 0.6 高い価値を有する。

3. その他

- ① 助走路は、跳馬の正面の端から測定し、助走路マットの端に固定された仕切り板の内側までとする。
- ② 片手での着手が削除された。
- ③ ヤマシタとびが削除された。
- ④ 種目別予選および決勝においては、(すべての跳越について) 異なった超越グループで、かつ跳馬価値点一覧に示されている第二局面が同じまたは類似していない二つの跳越技を実施しなければならない。

<跳馬価値点一覧の例>

※EG=技のグループ

EG1	EG2	EG3	EG4	EG5
伸身クエルボ ② ③	伸身カサマツ ① ③	ユルチェンコ 1 回ひねり ①	ロンダート 1/2～伸身クエルボ ② ③	シェルボ 1 回ひねり ①

上記の場合、伸身クエルボとユルチェンコ 1 回ひねりは○数字が重なっていないので、減点されることなく実施することができる。

＜平行棒変更点＞

1. 技のグループ

- I 両棒での支持技
- II 腕支持振動技
- III 長懸垂・逆懸垂振動技
- IV 終末技

- ① モイや後方車輪系の技は、振り下ろしで体が水平位に達するまで膝をまげてはならない。
- ② 個々の技が組み合わさって成り立っている技は、間に停止なく実施しなければならない。停止があった場合には分割しての判定となる。

2. 特別ルール

- ① 単棒縦向き倒立になる技は、両棒で行った技と同価値である。その例外として、ヒーリー系の技につなげた場合は、難度が一段階格上げとなる（このヒーリー系の技も難度が一段階格上げとなる）。単棒倒立での静止は認められる。ヒーリーの実施で大過失のなかった場合に限る。
- ② 開脚になる技（チップルトやアリカン等）は、単棒倒立になっても難度の格上げはない。
- ③ マクーツ系の技の単棒倒立部分での停滞や停止に対する評価は以下の通りである。

	1 秒未満の停滞	2 秒未満の停滞	2 秒以上の停止
D 審判	認定	認定	不認定
E 審判	-0.1	-0.3	-0.5

- ④ 単棒横向きからのヒーリーは、 360° 以上のひねりを必要とする。

3. 繰り返しについて

- ① 同じグループ内での姿勢の異なる同じ種類の宙返り技を行うことはできない。複数実施した場合、最も高い難度の技のみをカウントする（出現順ではない）。
- ② 後方車輪倒立技は最大 2 回までの実施に限られる。（Ⅲ-21、22、28、29、35）
 - ・後方車輪倒立
 - ・ピアスキー
 - ・後方車輪 1 回ひねり倒立
 - ・後方車輪 5/4 回ひねり倒立
 - ・後方車輪 1 回ひねり単棒倒立
- ③ 棒下宙返り（逆上がり）倒立技は最大 2 回までの実施に限られる。
（Ⅲ-106、107、108、114、119、120、130、136）
 - ・棒下宙返り（逆上がり）倒立
 - ・棒下宙返り（逆上がり）ひねり倒立（1/4 1/2 3/4）
 - ・テン・ハイビン
 - ・シュー・シーフォン
 - ・シャルロ
 - ・ヤムムロ
 - ・正面横向き立ちから遠い方の棒を握り逆上がり 1/4 ひねり倒立
 - ・正面横向き立ちから遠い方の棒を握り後方開脚浮き腰回転単棒横向き倒立

4. 難度変更・新規

○ディアミドフ 1/4 ひねり単棒倒立経過単棒 1 回ひねり (ペガン) 削除	
○ディアミドフ 1/4 ひねり	: C→D
○ゾンダーランド腕支持	: E→D
○後方棒上宙返り単棒縦向き倒立	: C
※ただし、ヒーリー系の技につなげた場合	: D
○前方伸身 5/4 宙返り腕支持	: C
○前振り上がりひねり倒立	: D→E
○後ろ振り上がり前方開脚 5/4 宙返り腕支持	: E
○屈膝でモイ	: C→B
○後方車輪単棒縦向き倒立	: C
※ただし、ヒーリー系の技につなげた場合	: D
○後方車輪ディアミドフ単棒縦向き倒立	: D
※ただし、ヒーリー系の技につなげた場合	: E
○懸垂前振り後方伸身宙返りひねり腕支持 (フォーキン)	: E
○逆上がり (棒下宙返り) 単棒縦向き倒立	: D
※ただし、ヒーリー系の技につなげた場合	: E
○逆上がり (棒下宙返り) 懸垂	: B→A
○逆上がり (棒下宙返り) 支持	: B
○棒下宙返り直接かかえ込み宙返り腕支持 (タジェダ)	: D→E
○前方かかえ込み 2 回宙返り 1 回ひねり下り (ラーデュエ)	: G
○後方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り	: D
(後方かかえ込み宙返りひねり前方かかえ込み宙返り下り)	

<鉄棒変更点>

1. 技のグループ

- I. 懸垂振動技
- II. 手放し技
- III. バーに近い技・アドラー系の技
- IV. 終末技

2. 組合せ

組合せ加点は、下記のとおりとする。

$$\begin{array}{ccccc} \text{手放し技} & & \text{手放し技} & & \text{加点} \\ C & + & C \text{以上} & = & 0.1 \\ & & \text{この逆も可} & & \end{array}$$

$$D \text{以上} + D \text{以上} = 0.2$$

注：カウントされる10技の中に含まれている必要はない。

3. その他

- ① 倒立になる後方の振動から、単純な方向変換や懸垂への振り下ろしは、減点対象になり、構成上の欠点として毎回0.3の減点となる。

例えば：・け上がり倒立や後ろ振り上がり倒立ー振り下ろして後方車輪、

- シュタルダー、後方浮支持回転倒立、ひねり大逆手懸垂、等
- ・ 逆手で後ろ振り上がり倒立とび順手持ち換え一前方に振り下ろして後方車輪、シュタルダー、後方浮支持回転倒立、等
(倒立を基準として角度逸脱の減点も適用される)

- ② 宙返りを伴いバーを越える手放し技は、車輪に続けなければならない。続かない場合はE審判により 0.3 の減点となる。
- ③ シュタルダー、エンドー、大逆手エンドーなどの鉄棒に近い技は倒立位から行わなければならない。(FIG・MAG 確認情報)
- ④ アドラー系の技は、倒立位から行う必要はない。
- アドラー系の技は、演技中に最大2回まで実施することができる。この場合、最も高い難度のものをカウントする(出現順ではない)。
- ⑤ ツォ・リミンでひねりが不十分な場合(最初のひねりで 90° を超える逸脱)、D審判によって難度は認められず、E審判によって 0.5 の減点を受けることになる。その際は、前方片手車輪(B難度)としても認められない。
- ⑥ 前方浮腰回転開脚抜き懸垂(支持)(Ⅲ-103)は車輪からでも、懸垂前振りからでもよい。

4. 難度変更・新規

- 懸垂前振り、およびシュタルダー1回ひねり(片)大逆手の廃止
- ウェルストローム(ヤマワキ1回ひねり) : E→F
- ピアッティ(ひねり)系 1段階格上げ
- 伸身イエガー1回ひねり : E→F
- ペガン系 1段階格上げ
- デフ(ギンガー1回ひねり) : E→F
- コバチ 屈身と伸身の統合
- カッシーナとピネダの統合
- コールマン : F→E
- け上がり倒立1回ひねり : 片大逆手 B、大逆手 C
- ワイラーひねり : B
- 後方浮支持回転とび1回ひねり倒立 : B→C
- 前方かかえ込み3回宙返り下り : F→G
- 後方かかえ込み3回宙返り下り(バーを越えても) : E→F
- 後方屈身3回宙返り下り : E→G
- 後方かかえ込み3回宙返り1回ひねり下り : F→G

以上